所員の自署紹介

『イギリスの王室』

著者：石井美樹子
河出書房新社 2007 年 8 月 20 日（136 頁）

イギリス王室の祖先を，バイキングとアングロ・サクソン時代からノルマン征服を経て現在のエリザベス二世にいたるまでのイギリス王室の通史であるが，出来事のみならず，登場人物の性格や容貌など，人柄などにも触れ，歴史上のヒロインやヒーローの人物実像にも迫る特異な通史となっている。早くから立憲主君制を発達させたこと，人民と共に歩むというイギリス王室の伝統が，ヨーロッパ全土を襲った共和主義と民主主義の波を泳ぎ切り，第一次，第二次大戦後を生き延びた。イギリス王室は長い伝統を誇るヨーロッパで唯一の王室であり，イギリスの文化や伝統は王室の存在と切り離すことはできない。

『色の心理学』

著者：人間科学部　三星宗雄
マックローリン出版 2008 年 1 月（200 頁）

色についての概説書である。私たちは色によって取り囲まれて生活している。白黒も色と考えれば色のついていない空間はない。色は元来事物の目に見えない内部の状態を教えてくれるものとして備わったと考えられる。例えば「顔色が悪い」というような場合，顔の色そのものというより，それを手がかりにして（目に見えない）身体の内部に何か異常があるのではないか，という推測をしていることになる。あるいは，「赤」という色を考えてみると，ある種のチョウの幼虫はいかにも毒々しい赤色を頭部にいただいている。その色によって，実は恐ろしい毒または武器を内部に持っていることを周囲の天敵に教え，結果的に生き延びる確率を高めている（警告色と呼ばれる）。また発情したメスザルのおしりが赤くなるのは，その色によって，生理的に（内的に）発情していることを周囲のオスザルにアピールし，結果的に自己の遺伝子を残す確率を高めている（婚姻色と呼ばれる）。そういう意味では，赤という色は両義的な信号を発している大変面白い色である。いずれにしても，まず色は生物（動植物ともに）の生き残りのための戦略として大変重要な役割を果たしている。

しかし私たち人間はそれにとどまらず，人工的に色彩を作り出し，それを積極的に多くの場面で利用している。知覚的な面の応用では，あの赤いネットに入ったミカンである。ネットを通して見ると本当に赤く見えるが，中のミカンを取り出してみると驚くほど黄色かったり，あるいは黄緑色だったりする。緑色のネットに入ったオクラも同じ応用例である。まさに天才的な色彩による商品戦略と言わざるを得ない。

本書では，色覚が進化の過程で備わった理由，または色の持つ本来の機能を強く意識した。「色が見えることによって，どのようなメリットがあるのか」という視点から，多少目的論的に，色のさまざまな側面を扱った（つもりである）。その試みが成功しているかどうかは読者の判断にお任せするしかない。

その書名を『色彩心理学』ではなく，『色の心理学』としたのは，狭い意味でのいわゆる色と心理との関係を扱っただけでなく，さまざまな感覚の特徴，形の知覚（ゲシュタルト心理学）と物体の認識，遠感覚としての視覚が持つ奥行き知覚，大脳の構造，感情などについても含めたからである。この点についてもその功罪については読者の判断を仰ぎたいと思う。

『ヘキュバのために！――シェイクスピアの主人公に与えた選択肢――』

著者：橋本　侃

欧友社 2007 年 9 月（323 頁）

平成 4（1992）年から 19（2007）年までに執筆したシェイクスピアと演劇についての論文をまとめたものである。ギリシャ悲劇から現代アメリカ演劇に至る悲劇の系譜を縦糸に，シェイクスピア悲劇を横糸に，岐路に立たされた主人公がする選択行為を主題として，演劇という発表手段で描かれた人間の生き方と人生を主人公たちに共通する表現方法である比較級構文から注目し，一つの選択に至るまでの言動を文学的に考察した。

確かに，主人公がする一つの重大な選択をする場面に口にする思考方法がヘレニズム・ヘブライズムに基づいた比較対照なのである。西洋の文化を支えてきた，ものの考え方の根本に「A か A でないか」というのと，「A か B か」という疑問文がある。前者は対象そのものの本質を問う古代ギリシャの遺産であり，後者は絶対的価値観＝神意に照らしての比較をする古代ヘブライ文化のそれである。シェイクスピアが活躍したイングランドはヘブライ文化を引き継ぐプロテスタンティズムの世界にある。興味深いことに，市民の娯楽であった演劇舞台の上で，西洋文化の伝統の根源にある思考方法を主人公がするのである。

この論文集は外国文学を研究する外国人学究の存在のあやうさから始まり，演じることの意味を自国の古典文学＝古事記・日本書紀に見出し，その意味を，時空を超える劇作家シェイクスピアが捉えた人生観に重ね，現代アメリカの平凡な一市民が抱えた悲劇の意味を最後に捉えた。